

中京大学図書館蔵 河内本源氏物語について

加藤 洋介

一

現在中京大学図書館に収蔵されている河内本源氏物語五十四卷五十三帖（若菜上卷の一括りが若菜下卷に合綴され、大部分は欠落）について言及されたものとしては、一九三七年（昭和十二）二月七日に当時の東京帝国大学で催された、源氏物語関係書の展覧に際しての解説が、管見では最も早い時期のものと思われる⁽¹⁾。

一〇 源氏物語 五十四帖 筆者未詳 大島雅太郎氏蔵

鎌倉時代後期の書写と考へらる。花散里、須磨、薄雲、玉鬘、常夏、野分、藤袴、夕霧、匂宮、宿木の十帖は、やや後代に於て補写せられたものならん。本書の学術上の価値は、標準に近しと推定せらるる句点声点を有し、本文も亦正しく、現存諸本中比較的形態の完全なる点に在り。なほ本書の表紙には左端に竹片を挿入し、或は金銀泥をもつて卷に因める文様をゑがき、或は卷名を葦手書となし、装幀に善美を盡したり。かく竹

片を使用せるは、本願寺本三十六人集の外に類例なく、美術的にも書誌学的にも貴重なる参考資料たり。

この後本書は、当時の所蔵者により「大島本」の名称（略号 大）をもって『校異源氏物語』（一九四二年）に河内本の一本として採用され⁽²⁾、これに索引などを増補して刊行された『源氏物語大成』（一九五三―五六年、以下『大成』と略称）研究篇「現存重要諸本の解説」においても、「吉野時代までに写されたものと思はれ、補写のものもほぼ同時代と推定される」とその書写時期が若干引き下げられたものの、「この本のやうにまとまった河内本は管見に入らない」、「この本の系統は河内本であるが、耕雲本を通過したものでないところに、その絶大な価値が存する」と、本書のもつ意義が繰り返し述べられている。

『大成』校異篇には、河内本二十部について、青表紙本との異同が掲げられているが⁽³⁾、そのうち中京本以外で比較的まとまったものとしては、

御 東山文庫蔵 各筆源氏

七 東山文庫蔵 七毫源氏

宮 国立歴史民俗博物館蔵（高松宮家旧蔵）

高松宮家本

尾 名古屋市蓬左文庫蔵 尾州家本

平 平瀬本

鳳 鳳来寺蔵 鳳来寺本

の六本が挙げられようが、各筆源氏・平瀬本は青表紙本や別本の巻を含み、七毫源氏は四十四帖（十帖欠）の現存、鳳来寺本四十八帖は一九一四年（大正三）の同寺火災により四周焼失し、須磨・明石の両巻は『大成』に校異掲載が不可能なほどに損傷を被っている。高松宮家本は耕雲本と称される系統の本で、やはり青表紙本・別本の巻を含むとされている。尾州家本は「正嘉二年五月六日（以）河州李部親行之本終一部書写之功畢 越州刺史平（花押）」という、源親行が河内本校訂の作業を終えたという建長七年（一二五五）から僅か三年後に「親行之本」をもって書写した旨の奥書を持つが、この本の本文には補写十三帖（賢木・明石・滯標・松風・少女・玉鬘・初音・螢・簪

火・行幸・真木柱・横笛・早蕨）を除いてほぼ全帖にわたって校合が施され、その校合後の本文が河内本の本文であり、校合に際しては非常に厳密な態度をもって臨まれたものとおぼしく、河内本の本文を再現するのに重要な本であることは間違いないものの、校合前の本文は河内本ではなかったといわざるをえないのである(4)。「大成」刊行後に発見・紹介された河内本も少なくないが、源氏物語全巻にわたるようなものはなく、なお中京本に対する「この本のやうにまとまつた河内本は管見に入らない」という『大成』の記述は、現在までのところ改める必要には及ばないものと思われる。

二

先に高松宮家本をもつて耕雲本と称される系統の本と述べたが、耕雲本とは、各帖末に耕雲（？一四二九）の署名と源氏物語の巻名を詠み込んだ巻名歌をもつことを形態上の特徴とする。中京本について『大成』が「この本の系統は河内本であるが、耕雲本を通過したものでないところに、その絶大な価値が存する」というのは、比較的まとまつた河内本諸本として挙げたうち、高松宮家本・尾州家本・鳳来寺本の三本が、例外的に松風巻のみ、青表紙本に近似した本文をもつことになっているものと思われる。源氏物語全五十四帖の本文が現存し、かつ全帖河内本の本文であるのが中京本のみということになるからである。これを池田亀鑑氏は、松風巻が尾州家本補写十三帖のうちの巻であり、その補写が耕雲本によってなされたことによるとされたのだが、耕雲本の本文は、尾州家本（の親本ないしはその忠実な写し）に若干の校訂を加え、人物や引歌の注記を加えたものであることが確実に知られる巻があり(5)、さらに尾州家本補写十三帖についても、池田氏の想定とは逆に、尾州家本の方が耕雲本の親本な

のではないかと推定される(6)。この問題については、初音巻の本文や鳳来寺本によってさらに検討を要するが、尾州家本や鳳来寺本も「耕雲本を通過したものでない」とすれば、中京本のもつ意義づけについても若干の変更が必要であろう。

河内本の成立については、各筆源氏および鳳来寺本に記された源親行の奥書から、「清書以前」に九帖を焼失、六帖を「被借失」ていることが知られる。また平瀬本の奥書から、この親行奥書にいう建長七年の河内本完成以後も、親行による諸本校合の作業が継続されていたとみる向きもある。こうした河内本源氏物語の成立事情を、現存諸本がどれほど反映しているのかということになると、具体的にはほとんどわかっていないといわざるをえない。河内本諸本間の異同は、定家の青表紙本に比してかなり少ないといわれ、事実『大成』に掲げられた校異によって見ても、河内本諸本をグループ分けしうる程の明確な違いはなかなか見出せない。そうした中で、松風巻のように極端な異同ではなくとも、尾州家本補写十三帖の巻にみられる高松宮家本・尾州家本・鳳来寺本のグループとそれ以外の河内本諸本の異同は、河内本成立事情を何らかのかたちで反映しているのではないかという可能性を有し、なお検討を要する課題であろう。あるいは、源氏物語宇治十帖の巻々では、中京本と各筆源氏あるいは伝為家筆本が、しばしば一致して他の河内本諸本と異同をみせる。例えば、

おもひやりにてすすありさまものーナシ御為大(橋姫一五三六―一四)

の校異は、この部分、

そのついでにもかくあやしうよつかぬおもひやりにてすすありさまものおもひのほかなる事などはつかし
うおほひたり

とあることからみれば、「おもひ」の語の「目移り」による脱文であることが想定され、各筆源氏・伝為家筆本・

中京本の三者の一致は偶然とは思われない。他の異同からみても、橋姫巻（『大成』所収河内本は「御七尾為平大鳳」の七本）におけるこの三本の親近性は確かであり、親行の段階か否かはともかく、この三本はある時点での祖本を共有していたものと思われる。他にも、

その、ち御こ、ちくるしとていつくにもく——ナシ御大（浮舟一八八五—一四）

おやのよろつにおもひいふありさまを——ナシ御大（浮舟一九〇四—一二）

という、やはり各筆源氏と中京本とが共通して有する脱文も注目されよう。青表紙本ほどではないにせよ、尾州家本補写十三帖以外の巻においても、巨視的には河内本であつても、その内部で諸本の本文が割れることがある。

「河内本諸本中に多少異同が認められるのは、むしろ転写の際の誤りによるか、他本との接触即ち混成によるか、等の事情を重くみるべきではあるまいか」(7)という見解があることをふまえつつ、源氏物語後半の巻では青表紙本と河内本の異同が極端に少なくなることとも合わせ、なお考究すべきであろう。その際、尾州家本・高松宮家本・鳳来寺本のグループに属さず、かつ全帖揃いの河内本として現存する中京本が、貴重な情報を提供してくれる資料であることはいうまでもない。なお、中京本には十帖の補写が含まれているが、古写の巻との本文上の質的差異は、現在までのところ見出せないでいる。他の河内本との取り合わせ本というには及ばないのではあるまいかと思われる。

三

中京本のもつ特色として『大成』が指摘し、また近時田村俊介氏も取り上げられたのは(8)、

俊本ヨソメイ江花両本ヨウメイ（手習一九九九—三）

などという注記で、東屋巻・手習巻の両巻に都合九箇所見出される(9)。この注記に記された「俊本」などの名称が、平瀬本奥書に見える親行が校合に使用した本の名称と一致し、親行奥書に明示された八本に、平瀬本奥書ならびに中京本注記にみえる十三本を加えると、親行が「殆散千万端之蒙」という校合に使用した「廿一部之本」に一致するということになる。

ただしこの注記の存在は、中京本の本文の質をも保証することにはならない。例えば手習巻について、『大成』校異篇によっても、

今は世になき物にこそやう／＼おほしなりぬらめよろつのことさしあたりたるやうにはえしもあらぬわさになむといふにつけてもいと、涙くみてへたてきこゆる心は侍らねとあやしくていき返ける程によろつのこと夢の世にたとられてあらぬ世に生れたらん人はかゝる心ちやすらんとおほえ侍れは——ナシ大(手習二〇一〇——一一)のわかき人はかやう——ナシ大(手習二〇一八——五)

という校異が掲げられており、いずれも中京本の目移りによる脱文と判断される。写本である以上、ある程度の誤写は避けられないであろう。ところが一方で中京本には、他の資料とつきあわせてみることによってはじめて知られる、非常に興味深い異文がある。

旅の所——たひところ大(東屋一八四二——八)

この異文、一見したところ中京本の誤脱による独自異文であるかに見えるが、親行の弟素寂による注釈書『紫明抄』に引用された本文に一致する。親行の河内本が、子の聖覚に伝えられたことは、東山文庫本各筆源氏の奥書に見えるが、弟の素寂の手元にも河内本があったらしく、『紫明抄』所引の本文は河内本である。次のような事例もある。

やかの―ナシ七―かの尾前鳳―やかの「墨」尾（東屋一八四五―六）

『大成』所収の河内本では、中京本のみが「やかの」とするが、これが『紫明抄』ならびに岩国吉川家本源氏物語の本文と一致するのである。吉川家本は補写以外の四十七帖が河内本の本文をもつとされるが⁽¹⁰⁾、この本で注目されるのは、各筆源氏と一部記述の異なる親行奥書をもつ点である。すなわち建長七年七月七日の河内本完成以後のある時、親行筆夢浮橋巻を素寂が「奪取」していったのだという。ともに素寂に関わる『紫明抄』と吉川家本、そして中京本が一致するというのは、偶然とも思われない。河内本に素寂系と聖覚系を想定する説もあり⁽¹¹⁾、中京本がその素寂系にあたる可能性は、検討されてしかるべきであろう。ただし残念ながら、こうした細部にわたって本文を比較検証するための環境は、現在いまだ整っていない。『大成』校異篇によって河内本に関わる資料操作をする限界に加え⁽¹²⁾、吉川家本の校異は『大成』に未収である。現在『大成』の河内本校異を補訂する作業をすすめているが⁽¹³⁾、なお平瀬本・鳳来寺本は未見である。中京本の本文には、尾州家本校合後の本文に比べて、独自異文がやや多く含まれているが、そこには以上のような例や、あるいは尾州家本校合前の本文に一致する異文が見出され、それゆえに一層の資料上の整備と、本文精査の必要が痛感されるのである。

四

活字によって源氏物語の本文が提供される場合、現在では概ね藤原定家の青表紙本によることになっている。親行の校訂が「親行の一家の見識、即ち主観的判断によつて、諸本の異文を取捨選択した」⁽¹⁴⁾もので、近代の文献学の立場からすれば、新たな異本を作ったにすぎないということになってしまふからである。だかこれも親行の奥書、

あるいは平瀬本奥書や中京本書入注記などからの推定にとどまり、具体的な親行の作業の実態は、ほとんどわからない。定家の青表紙本についても事情は同様である。

現行の活字本の多くは、定家自筆ないしはその忠実な模本とされる本文が現存しない巻については、大島本（古代学協会蔵）を底本とし、他の青表紙本諸本によって校訂を加えるというのが、定家の青表紙本を復原するための最も一般的な方法である。阿部秋生氏が本文を担当されている、小学館「日本古典文学全集」および「完訳日本の古典」は、巻末に校訂箇所の一覧が明示されており有益であるが、例えば手習巻では大島本を底本とした上で、「全集」では一八六箇所、「完訳」では二〇一箇所に校訂が施されている⁽¹⁵⁾。ところがその校訂箇所のほとんどは、結果的に河内本にも一致する本文へと校訂されている。河内本に一致しない本文への校訂は三十三箇所にすぎず、この三十三箇所は大島本が河内本と一致し、他の青表紙本諸本とは異同をみせるということになる。校訂後の青表紙本と河内本の異同は、結局のところ『大成』一頁あたり一―二箇所程度になってしまうのである。

青表紙本と河内本の異同が、源氏物語後半の巻でかなり少なくなることは夙に知られているが、こうした異同の出現状況は、当時定家や親行がみた手習巻の本文にはほとんど異同がなかったということであろう。あるいは親行の河内本校訂作業や、親行奥書にいう「焼失」「借失」の十五帖に関わる可能性もある。だがこのことは河内本のみの問題にとどまらない。

『大成』手習巻は底本を大島本とし、「榊二肖三」の四本との異同を掲げるが、「全集」「完訳」での校訂は、そのかなりの部分が、この四本すべてでないしは三本が一致して大島本と異同を見せる時に行われているようである⁽¹⁶⁾。ところが「榊二肖三」の四本が一致して大島本と異なるにも関わらず、校訂の手が及んでいない異同がある。『大成』校異篇では、一頁に青表紙本・河内本・別本の校異を掲載する必要上、音便・書入等の校異を、河内本・別本

のみ割愛しているが、中京本を含め、こうした割愛された校異を、青表紙本諸本の校異につきあわせてみると(17)、

いたうーいたく河〔榊二肖三〕（一九九三―一〇）

いかめしうもーいかめしくも河〔榊二肖三〕（一九九六―一二）

といった音便に関わるものが、三十九箇所中二十九箇所と、その大部分を占め、しかも「榊二肖三」が河内本に一致しないのは二箇所にすぎない。「榊二肖三」のうちの三本一致の場合、「完訳」未校訂百十箇所のうち、音便に関わるもの六十三箇所（うち六十箇所は「榊二三」の一致）、うち河内本が一致しないもの三箇所という結果になる。手習巻の青表紙本と河内本にはほとんど異同がないことを裏付けるとともに、逆にその中で、ひとり大島本のみが音便化した形をとり孤立している。先述の中京本手習巻の注記に関わる部分でも、二箇所は「全集」「完訳」の校訂の対象となり、多数の青表紙本諸本および河内本に一致する本文へと校訂されている。この手習巻と同様のことが指摘できる巻はほかにもあり、河内本の本文への注目が、青表紙本の側の問題を照らし出すことにも繋がるものとして、留意されてしかるべきであろう。

〔付記〕中京本の閲覧に加え、このような報告の場を与えていただいた、中京大学図書館御当局ならびに同館平田伸夫氏に心より御礼申し上げます。

注

- (1) 『源氏物語展観書解説』、池田亀鑑氏の執筆による。これに先立って開催された「源氏物語に関する展覧会」の目録、『源氏物語に関する展観書目録』（一九三二年十一月）の「河内本系統の諸本」には本書に該当するものは見当たらないようであり、池田亀鑑「源氏物語系統論序説——主として青表紙本・河内本の形態に関する研究——」（『岩波講座 日本文学』一九三三年一月）にも本書に関する言及はない。
- (2) ただしこの「大島本」なる通称は、青表紙本の本文を有し、活字本の主底本として採用されることの多い古代学協会蔵飛鳥井雅康等筆本を指すことが一般的であり、それとの混同を避けるためにも「中京本河内本源氏物語」と呼ばれるべきであろう。本稿においても、支障のない限り「大島本」の名称は古代学協会蔵本にのみ用いる。
- (3) 注(1)の池田氏論考では「我々は現在までに三十数部の河内本にふれることが出来た」という。
- (4) 堀部正二「舊尾州家蔵河内本源氏物語存疑」、「源氏物語雑々私記」のうちの二節、『国語国文』一九四〇年四月、『中古日本文学の研究』（一九四三年、教育図書）所収。拙稿「河内本本文の成立——舊尾州家蔵河内本源氏物語存疑」続貂——、『講座 平安文学論究 第十輯』、一九九四年十二月。
- (5) 注(4)拙稿参照。
- (6) 拙稿「尾州家河内本から耕雲本源氏物語へ——所謂補写十三帖をめぐって——」、『愛知県立大学文学部論集』第四十四号、一九九六年二月。
- (7) 『源氏物語大成』研究篇、一四四頁。
- (8) 田村俊介「河内本系善本を求めて」、『中古文学』第四十五号、一九九〇年六月。
- (9) これは異文に関わる注記のみの数で、ほかにも中京本としては例外的にこの二巻にのみ、引歌や解釈上の注記がある。
- (10) 池田利夫「源氏物語の文献学的研究序説」、笠間書院、一九八八年。
- (11) 稲賀敬二「源氏物語の研究——成立と伝流——」、笠間書院、一九六七年。
- (12) 加藤洋介・安藤徹「源氏物語大成 校異篇」をめぐる諸問題——河内本校異をめぐって——、『名古屋大学国語国文学』第七三号、一九九三年十二月。
- (13) 『源氏物語大成 校異篇 河内本校異補遺 稿（一）』（四）（一九九三年～九六年）。
- (14) 『源氏物語大成』研究篇、一三五頁。
- (15) この数値は私に作成した校異データ上でのもので、阿部氏の「校訂付記」の数値とは一致しない。
- (16) もちろん異同の多数決のみによるのではないが、「榊二肖三」の四本が一致して大島本と異同をみせ、かつ校訂されていないのは、後述の音便に関わるものを除くと「花」はなを河（榊二肖三）（二〇四——二二）など五箇所程度かと思われる。四本一致の場合で校訂されているのは一五九箇所。なお阿部氏は『大成』所収の諸本の他、数本の青表紙本を加えて調査されている。
- (17) 『大成』手習巻の河内本は「御七尾平前大鳳」の七本の校異を掲げるが、平瀬本・鳳来寺本は未見のため、便宜上「御七尾前大」の五本が一致する場合「河」として掲げた。